

○本能寺は静かうの花くたしかな  
 ○アイドルと呼びたき君ら燕の子  
 ○遺影の手伸びてきそうな柏餅

ゆの

弘

○走り梅雨誰も書かない伝言板  
 ○遠つ世へひとつ持てゆく柏餅  
 ○卯の花腐しステルスは海底に

美和

少子化の初宮詣で椎若葉  
 五月闇大河の岸の水位柱  
 大原の紫薊の植多つけ明日は雨

郁代

○夏来たるポニーテールの弾む朝  
 ○花桐の聳える山路幾曲り  
 夕まぐれ卯の花垣に灯のにじむ

道彦

○卯の花や警策はつしと肩を打つ  
 ○柏餅終の棲家の梁見つつ  
 五月晴折り目ピシりと黒ズボン

まり

○花桐を散らす大風元親忌  
 うれしさは苺つなぎの草苺  
 親譲り漉餡でつくる柏餅



○印

農子

○弟は姉より優し柏餅  
 連れ立ちてランドセル行く花空木  
 歯科眼科受診の続く薄暑かな

初江

○新緑のふつと匂って行き方しれず  
 ○太陽を転ろがしながら日傘ゆく  
 ○卯の花をみつつ園児の散歩道

酔花

えり

山卯木人恋しさも散りてをり  
 宵の雨空家塀越し花卯木  
 一豊の柏三葉千代の餅

保明

むくむくと山包み込む椎の花  
 柏餅百二十円で整列し  
 卯の花や触角を振る髭長蛾

紀代

うの花やサロンエプロン白にせり  
 茜という山あじさいや色を待つ  
 スマホ持ちちにゆつと掴む柏餅

佐和子

○四畳半に家族揃いし柏餅  
 ○万緑や縄文人のゲノム読む  
 山姥の話卯の花腐しかな

文子

○遙か来て金印の島卯波立つ  
 柏餅大振り小振り蒸しあがり  
 弟は干し芋の柴餅好きだった



○卯の花や友訪う道へ口ずさみ  
 母の手に遥かはるかの柏餅  
 旅の子と「ここ」二寧坂薄暑光

富江

笛子

味元 昭次 作品

馬齢てふ言葉噛み締む柏餅  
 亡き夫のイちし卯の花月夜かな  
 卯の花の峠越え来し菓売り